

第一回 迷い出た羊 聖書箇所 ルカ 15：1～8 マタイ 18：12～14

概要欄からレジュメをプリントしてからご視聴ください

始めの祈り

あわれみ深い神様は、いつも私たちと共にいてくださいます。私たちが迷い出た羊のようにさまよっている時には、探し出してください。そして、見つけたら、担いだり、抱きしめたりして喜んで迎えてくださいます。どうかその喜びを感じられますように。そして、私たちも良い羊飼いのように迷い出た羊を助けることができますように。私たちの主、イエス・キリストによって。アーメン

イエスのたとえ話の味わい方のポイント

1. たとえ話の前後関係を確認する。
2. たとえ話の意味を私たちの生き方に当てはめる
3. 「耳が痛い、やってみよう！」という気持ちになる。

1. たとえ話の前後関係を確認 モンテッソーリ教育の宗教教育の視点から

マリア・モンテッソーリ（1870～1952）は、イタリアで初めての女性医学博士であり教育者です。モンテッソーリ教育には5つの領域がありますが、具体的なもの（教具）を使って、見たり、触ったり感覚を使いながら学ぶ教育方法です。詳しくは参考資料をご覧ください。この教育方法で宗教を伝える方法について長谷川京子先生が本を書かれているので、その内容に基づいてお話しします。実演できたらいいのですが、モンテッソーリ教育の提示は、こどもたちの前でするので、今日は説明をさせていただきます。（見つけた羊の教具）

『アトリウムの子どもたち モンテッソーリ教育の宗教教育』

長谷川京子著 サン・パウロ 2017年 (一部表現を変えています)

第2章 良い羊飼いのたとえ話

1. 前後関係 「見失った羊」を考える前に「良い羊飼い」について考える

タイトル 「羊は誰のこと？」 イエス様と自分 そして共同体との関係

イエス様は弟子たちによく、たとえ話をしていました。たとえ話の良いところは定義（これですという明確な答え）がないことです。

たとえで言われると、私たちは「こんなかなあ？」「あんなかなあ？」と各々好きなように想像できます。イエス様は「わたしは良い羊飼である」（ヨハネ 10：11）と、ご自分を良い羊飼いにたどえておられます。

このお話は、一人の羊飼いとたくさんの羊たちのお話のようですが、実はその中にとっても深いメッセージが込められています。

先日の教会学校ではモンテッソーリ教育の教具を使ってこのようにお話ししました。

～良い羊飼いと見失った羊の例え話の紹介～

「イエス様は、良い羊飼いです。貧しいけれども、心がとてもきれいな人です。」

「良い羊飼いは、たくさんの羊を飼っています。たくさんの羊がいますが、1匹、1匹の名前をつけて大事にしています。」

「いつもは安全な柵の中で飼っていますが、美味しい草や、美味しい水のあるところに羊たちを連れていきます」

「美味しい草や、美味しい水があるところに連れて行く時、1匹、1匹の名前を呼んで外に出します。」

「良い羊飼いは、羊をととても大切に、愛しているので、羊がたくさんいても、ちゃんと1匹、1匹をお世話します。」

「羊は、良い羊飼いの声を知っているので、呼ばれたら柵から出てきます。」

「全部の羊が柵から出ると、良い羊飼いは先頭に立って案内します。」

「途中で、危ないオオカミが出てきたら、良い羊飼いは、命懸けで羊たちを守ります。」

「良い羊飼いは、羊を守るために命を捨てます」(ヨハネ9:11)

「美味しい草のあるところに来ました。羊たちはもぐもぐたくさん草を食べます。」

「十分食べたら、今度は美味しい水のあるところに連れていきます」

「美味しい水のあるところに来ました。羊たちはごくごく美味しい水をたくさん飲みました。」

「ところが、1匹の羊が、美味しい水のところに残ってしまいました」(1匹の羊を、群れから離す)

「美味しい草も食べて、美味しい水も飲んだので羊たちは元の柵のところに帰ります」

「よい、羊飼いは、柵に入るときに、1匹、1匹の名前を呼びます」

「あれ！ 1匹いない！ 探しに行かなきゃ！」

「良い羊飼いは、柵の中に99匹を入れて、迷子の1匹を探しにいきます」

「どこだろう？ どこだろう？」「そうだ、美味しい水のところだ！」

「良い羊飼いは、美味しい水のあるところまで、全力疾走です。もし、狼に見つかったら大変だからです」

「走って、走って・・・いた！ 良い羊飼いは大喜び！」

「お前はどこに行ってたんだ！ どうして勝手なことしたんだ！」と鞭で叩くことはしません。肩に抱えて大喜びで帰ります。

「柵の中にいた羊たちも、1匹が帰ってきて大喜び！」

「良い羊飼いの声は遠くまで響くので、やがて、ここにいる羊だけでなく、世界中の羊がここに集まり、一人の良い羊飼いの1つの大きな群れになることでしょう。」(共同体が広がる)

土曜学校では、このような筋書きでお話しするつもりでした。

ところが、私が群れから離れた、迷子の1匹の羊を、

「この1匹かわいそう！」と小学1年生の女の子が脇から手を出して、勝手に柵の中に入れてしまいました。

女の子も、良い羊飼いの心と同じでした。

「1匹だから仕方ない」という子はいませんでした。

「みんなと一緒になれてよかった！」という気持ちでした。

大人の私たちも、この女の子の心を持ちたいものです。

このお話で子どもたちに伝えたい大切なメッセージは「イエス様はたくさんの人を命を捧げるほど愛してくださる。そのうちの一人はわたし自身」ということです。

子どもたちは、アトリウムという宗教のお部屋に入ると、「この羊はわたしのことなんだ！」と気づきます。大人が教えるのではなく、子どもたちが自分で発見して、驚き、喜ぶように環境を整えます。そして、気づくまで待つことが大切です。

「自分が羊」と気づいた子どもは、こんな祈りをしていました。

「アジアとか、世界中の人を守ってくれてありがとうございます。」

「羊飼いは良い人だから、そんな人になりたいな。」

「私にもイエス様の声が聞こえますように。」

次に「見つけた羊」

タイトル 「心が迷子になったことある？」 イエス様の愛は深く、変わらない

大人はつい、「見失った羊のたとえ話で、残りの 99 匹はどうなるのかしら？」と考えてしまいます。

けれども、子どもは、自分が親からはぐれて迷子になった体験と重ね合わせて、迷子の羊の気持ちになります。

羊飼いが「どこに行ってたんだ！」「散々探したんだぞ！」と怒るのではなく、見つけたことを喜んで、肩に乗せて連れ帰ってくれたことに感動します。

子育ての場面で考えると「自分は人よりできない」とコンプレックスを感じている子には「あなたの良いところを見つけたよ！」「あなたが自然でいられるのが一番嬉しい」と言ってもらえると、子どもは自信を取り戻せます。自分は「愛されている」と感じます。

ソフィア・カヴァレッティ先生（モンテッソーリ教育の宗教の教具を開発した比較宗教学者）は、「見失ったことよりも、『見つけた』ことに大切な意味がある」と考えました。

子どもたちに「迷子の羊」を「見つけた羊」と言い換えて話すように勧めています

子どもたちは「見つけてもらえたこと」を喜んで、感謝します。

「見つけた羊」のお話をした後に、子どもたちはこのようなお祈りをしてくれました。

「羊を探してくれてありがとう」

「羊をいつも守ってくれてありがとう。」

「イエス様は100匹も羊を飼っているのに、1匹でも、いなくなったのがわかって、探しに行くのがすごいと思った」

「心の中にいてくれてありがとう」

「神様、いつもそばにいてくれてありがとう」

子どもの祈りの言葉のように「神様がいつもそばにいてくれる」喜びを大人の私たちも感じたいものです。

振り返りの質問

Q. 神様が探し出してくれた、という経験がありますか？ 自分に対しても、周りの人に対しても。

2. たとえ話の意味を私たちの生き方に当てはめる

ルカ福音書での「見失った羊」のたとえ話の位置付け

『宣教者を育てるイエス』より 一部表現を変えています カルロ・マリア・マルティーニ著

今道瑤子訳 1988年 女子パウロ会

痛悔した強盗を受け入れるイエス（ルカ 23：39～40）

ルカだけが伝える場面。二人の強盗のうち一人は最後に回心する美しい場面。

強盗は暴力によって生きて来ました。権力を持つ強い者が勝つと思ってきました。けれども、自分よりも強い者に負けました。社会への怒り、恨み、悔しさ・・・を抱えて十字架につけられます。十字架刑という最悪の結末・・・ところが、謙遜に耐え忍ぶイエスを見るうちに一人の強盗は新しい世界を見ます。暴力が支配するのではない世界。強い者が勝つのではない世界。そんなものを今まで見たことはありませんでした。

「われわれは、自分のしたことの報いを受けているから当たり前だ・・・」 イエスは何もしていないのに、不正をした側にいます。われわれと違うと、一人の強盗は気付きました。イエスは全く違う人間なのに同じ刑に処せられている。

一人の強盗の眠っていた正直さが表に出ます。それだけでなく、イエスに信頼して「どうか私を思い出して下さい」と願います。

「どうか私を思い出して下さい」 この強盗は、福音を悟りました。イエスの父への信頼、無限のゆるしに触れました。十字架上に、神の力が働いたことを知りました。イエスには自分を救う力があると悟りました。そして「イエスに任せよう！」と決心します。

ほんの短い時間に彼は変わりました。

「あなたに言うておく。今日、あなたは私と共に楽園にいる」最後にイエスが回心に導いた人はこの強盗でした。私たちには回心への道がどこにでもあります。

この強盗は、受難の場面だけで福音を信じました。神の栄光を十字架上で見ました。

ルカは回心して救われる強盗のエピソードに大きな意味を与えます。受難におけるイエスの宣教を救いの活動の頂点にしています。

しかし、わたしたちは「救われたのはたった一人か？」「多くの人はそのまま家に帰ったではないか？」という疑問を持ちやすい。

ルカ 15 章の 3 つのたとえ話（見失った羊、無くした銀貨、放蕩息子）は、イエスが十字架上で見捨てられた強盗を救う神のイメージと重なります。

どれも「1 つ」が強調されている。100 匹に対して 1 匹と不釣り合いなほど強調されている。

羊のたとえ ルカ 15：4

どうしてたった 1 匹のために？ 99 匹の安全が確保された内容はないのでおかしい、と感じる人がいるかもしれません。冷静さを失っている？

一方、神がたった一人に人間、しかも一番小さな人間をどれほど大事にしているかを理解できます。

他の 2 つのたとえ話（無くした銀貨、放蕩息子）も同様。

たった一人でも、救いを必要とする者がいれば、神はあらゆる配慮をする。そして、救いは神の喜びになる。福音の神はそのようなもの。喜びがいつも強調されている。

「一緒に喜んで下さい。」「祝宴を開くのは当たり前ではないか？」

神は、天地万物をおさめる神ですが、たった一人のために何もかも忘れて喜ぶ方。いつも冷静で平等を求める姿とは異なります。

私たちの反省として、全員に平等に、多くの人に気を配ることを優先しすぎる傾向があります。また、多くの人に奉仕している時には、喜びが湧きにくいものです。一人でも大事、大きな価値があることをイエスは訴えています。愛のこもった神様の配慮がルカ 15 章と、救われた強盗の話で示されている。

振り返りの質問

Q. 「一人の救い」という感覚がありますか？ 「大勢に均等に」という感覚の方が強いですか？

Q. 奉仕するとき「一人のため」という思い入れがありますか？

2. たとえ話の意味を私たちの生き方に当てはめる

『シンドラーのリスト』

ナチによるユダヤ虐殺をまのあたりにしたドイツ人実業家オスカー・シンドラーは、秘かにユダヤ人の救済を決心する。彼は労働力の確保という名目で、多くのユダヤ人を安全な収容所に移動させていくのだが……。 映画のあらすじ <https://ciatr.jp/topics/244886>

『シンドラーのリスト』の終わりにこのような素晴らしいやりとりがあります。

オスカー・シンドラー「一つの生命（いのち）を救う者が世界を救える」 「もっと救い出せた」

会計士のイザック シュターン 「オスカー、あなたはここの 1100 人を救ったんです」

「彼らから新しい世代が育ちます」

オスカー「もっと大勢を救えた」「車を売れば 10 人を救えたはずだ。10 人だぞ」

「この金のバッジで 2 人救えた。いやたとえ一人でもいい。1 人救えた。人間 1 人だぞ。努力すればもう 1 人救えたのに・・・しなかった」

（シンドラーとイザック シュターンは抱き合って、お互いの思いを伝えます。）

「見失った羊」との関係

「一つの生命（いのち）を救う者が世界を救える」

シンドラーの「いやたとえ一人でもいい。1 人救えた。人間 1 人だぞ。努力すればもう 1 人救えたのに・・・しなかった」の言葉。私たちに迫ってくるものがあります。

シンドラーの言葉は、イエス様が一人を探す、一人を救う心を。また、救えなかった悔しさまで表しているように思います。

Schindler's List | "I Didn't Do Enough" <https://www.youtube.com/watch?v=W9vj2Wf57rQ>

5分28秒

既にご覧になられた方も、もう一度『シンドラーのリスト』見直すことをお勧めします。

映画の音楽も私たちに訴えかけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=PD7M7j1OM8U&list=RDZP3HPffMEII&index=2> 4分40秒

シンドラーのリスト パールマン ニューヨークフィル <https://www.youtube.com/watch?v=ZP3HPffMEII>

4分10秒

<https://www.youtube.com/watch?v=iFGrooN6YDc&list=RDZP3HPffMEII&index=3> 6分19秒

3. 「耳が痛い、やってみよう！」という気持ちになる

具体的な取り組み 難民支援 2015年～

ステップ1 (「なぜドイツはシリア難民を受け入れるのか?」をテーマにしてシンポジウムから)

・1965年ハンガリー動乱のクリスマスのころ。10歳の私はハンガリーを離れることになりました。

「自分は難民になる。家もなくなる、国もなくなる・・・これからどうなるの? 不安でいっぱい

だったとき、同じ年くらいのドイツの子が箱をくれました。きっと違う言葉を話す私たちに何かを感じたのでしょう。中にケーキが入っていました。おそらく自分が食べるつもりだったケーキを譲ってくれました。」これから難民になる不安・・・でもいいこともある、ケーキはそう思わせてくれました。以来、苦しくなったときケーキのことを思い出して頑張れました。50年経っても忘れられません。今でも思い出すと涙が出てきます。

→こどもの善意には力があることを実感

ステップ2

・幼稚園の先生たちは、難民の子たちと日本の子たちの比較の資料を作りました。水・学校・家・ご飯、違いを感じて、自分で考えた祈りの言葉を添えて募金しました。それもお母さんからただもらったのではなく、好きなガチャガチャを我慢などしてその分を募金し続けました。

ステップ3

・園児さんからの募金を委ねた難民支援協会からの報告。

「年が明けてすぐに、アフリカのある国から園児さんと同じくらいの2人のお子さんを連れてお父さんが支援協会を訪れました。協会が確保している19の一時宿泊施設は他の難民の方で満室でした。でも、そのまま追いかえせません。小さなお子さん2人が寒空の下で過ごすのはあまりにも酷なため、急遽、ホテルを手配しました。お父さんは子どもたちを守るためにも必死です。子どもたちはその様子を察してか、とてもお利口で、泣くこともわがままを言うこともなく、お父さんの横にぴったりついて、相談が終わるのを静かに待っています。園児さんのご支援のもと、

この家族をはじめ、できる限り寄り添って支えています。」

2011 年から始めた「カブトムシ献金」は、一人の難民、1つの家族を支える取り組みです。虫の命を育みながら難民を支援する取り組みです。小さな応援を今年もできました。献金は20万円になり、難民支援協会さんに送金しました。<https://www.refugee.or.jp>

今年、成虫を分けてくれた教会学校のおともだちの言葉

「来年はもっと神父さんに成虫を届けたい」と思っている。とても嬉しいです。昨日もあるご夫婦が幼虫を40匹持ってきてくださいました。大きなカブトムシになるには幼虫の時に質の良いカブトムシ飼育マットを食べることが必要です。9月4日の説教でご寄付を呼びかけたら応えてくださいました。

9月8日、20日、22日にカブトムシマットが届きました。難民の一人に、1つの家族に、支援が届くように、カブトムシを大切に育てています。

振り返りの質問

Q. 自分が迷子になった羊になってみる。その心細さと、見つけ出してくれた喜びを黙想しましょう。

Q. 大きなことをしようとするが漠然として何も実行に移せないものです。身近なことでできそうなことはありませんか？ 継続して支援することが大切です。具体的な行動が何かありますか？

結びの祈り

あわれみ深い神様は、私たちが迷い出たら一生懸命探してくれます。見つけたら喜んで迎えてくださいます。どうかその喜びを感じられますように。そして、私たちも良い羊飼いのように誰かを助けることができますように。私たちの主、イエス・キリストによって。アーメン

ご視聴ありがとうございました。これからイエスのたとえ話で良い黙想をされてください。

参考文献

『アトリウムの子どもたち モンテッソーリの宗教教育』 長谷川京子著 サンパウロ 2017年

『宣教者を育てるイエス』 カルロ・マリア・マルティーニ著 今道瑤子訳

1988年 女子パウロ会